

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の、
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

ざいちのち

No. 19 2010. 05.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市 木浜

守山フィールドステーション

「どっこいしょ」—旧野洲川伏流水の利用— 生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

開発（かいほつ）集落に生まれ育った A さん（84 歳）の話に必ずでてくるのは、水にまつわる思い出である。

野洲川が改修される以前、開発では、豊かな湧水や地下水を利用していた。その一つが、竹の配水管の利用（本ニューズレター第 4 号参照）であり、他方、「どっこいしょ」と呼ばれる井戸である。どっこいしょは、水脈を熟知しているどっこいしょ屋（池突き屋）が野洲川の伏流水がある地下水層にボーリングをして行われた。その形状は一般的な井戸とは異なる。上部がすり鉢のように広がった陶器製の円柱（長さ 1.3m、直径約 40cm）が、地表から 30cm だして地中に埋められており、その上に木の蓋がしてあった。ボーリングの穴に入れられた長い竹筒から、この円柱に水がためられた。当時、在所（開発集落）にはどっこいしょ屋が 1 件あった。親方が 3～4 人の井戸を掘る人を連れてきて、「よいとまけ、どっこいしょ」と井戸を掘る時に、何度も掛け声をかけあったため、「どっこいしょ」といわれたという。一般にどっこいしょは自噴井戸と説明される。だが、A さんは、自噴井戸とは、1m くらい掘って簡単に水が噴き出るものであり、どっこいしょ屋にお金を払って井戸を深く掘るどっこいしょは、自噴ではないと言う。

どっこいしょは、屋敷地に掘られて生活用の「使い水」として用いられていたほか、田の近くに掘られ、農業用水に使われていた。ここでは、「使い水」について取り上げたい。

かつて在所では、旧野洲川堤防の外側の下の湧水が里川（A さんは在所に流れる小川を里川と呼ぶ）となって流れ出て、人々の暮らしに利用されていた。在所では、里川に面した屋敷地の一面に茅葺でひさしだけを瓦で葺いた小屋が建てられていた。そこは「井戸端」と呼ばれ、大小の 2 層に分かれた長方形

の池があった。この池の近くに 2～3 段の棚が作られており、炊事道具のほか、石の糊ひき臼（着物の糊つけをするための糊は、米の粉を用いた）、石の重しをしたフナズシ桶や漬物桶、醤油を入れた大きな陶器製の壺などが置いてあった。

井戸端には竹の配水管から水をひいた「取り池」、またはどっこいしょのいずれかがあった。これら両方があるのは、少数の金持ちだけだった。

取り池は、直径 1m 深さ 2m の丸い池にすぎず、この池から水を汲んで長方形の池に水を入れなければならなかった。他方、どっこいしょがある井戸端では、上に述べた円柱につなげられた竹筒で長方形の池の小さい方の池に途切れなく水が流れており、飲料水として使われていた。この池では、夏はスイカを冷したりした。大きい池の水は洗いものに使われたり、風呂の水や洗濯をする際に、ここから水を汲んでいた。

そして、大きな池から流れる水は井戸端に面する里川に直接流されていた。この川には高さ 2m、長さ 1.8m 程の「板囲い」がしてあり、川にかかる板囲いの両端に竹で作った柵をして、獲ってきたコイやフナを飼っていた。

このように開発集落では、野洲川の伏流水をどっこいしょによって生活用水として井戸端で用いた後、同川の湧水から流れる里川に流すという水の循環が行われていた。そして、井戸端の水が流れる里川では、水田や川で獲った魚を飼っていた。このように開発集落における水の循環と利用は、野洲川の水の恵みに基づいており、人々の生活と密接に結びついていたのである。



写真: 井戸端のどっこいしょ(上部の丸い円柱)と長方形の 2 層の池(琵琶湖博物館で撮影)。A さんは、琵琶湖博物館で復元されている井戸端在所の井戸端と同じだと言う。

朽木フィールドステーション

冷夏での焼畑

滋賀県立大学/朽木 FS 黒田末寿

今年の焼畑のスケジュール

例年、焼畑の火入れは盆前後に行っている。余呉町の菅並地区で昨年伐採した場所で、火入れを行うべく、地元と交渉中である。順調にいけば、菅並の焼畑の火入れは8月12日になる。この現場は高時川ぞいの西南むき斜面で、協力員の永井邦太郎さんによれば、午後は川風が強くなるので、10時に火入れし午前中に終了する予定である。

余呉の赤子山スキー場でも、ウッディパル余呉との共同で昨年どおり焼畑をする。こちらは盆明けから8月20日までに火入れ・播種を行う。今津の椋川の休耕地と、できたら、朽木の生杉でも小規模の火入れをめざす。これらの火入れも盆前後になるので、迎え火・送り火のような感じで3、4箇所で煙が上がることになる。

春の冷え込み

今年は雨が多く、日照量が極端に少なく、いつまでも寒い。たまに晴れたかと思えば、放射冷却による霜注意報が出る始末である。しかも、気象庁が出した6～8月の3ヶ月予報では、この傾向は7月中続らしい。太平洋高気圧の勢いが弱く、梅雨前線を押し上げることができず長雨になるという予想だ。

ここ数年、春先に異常に暖かい日が続き、桜の開花が早いのにその後雨と曇りの日が続いて寒くなる天候不順のパターンだった。今年はそれがより極端になっている。異常な天候のせい、うちの庭では例年6月に入ってぽつぽつと咲き始めるドクダミ



写真 1: 山かぶらの菜の花(2008年4月)

の花が、5月の終わりで満開になっている。茎も例年なら30～50センチメートルぐらいに伸びているはずだが、その半分もない。余呉の山里では、サクラ・タムシバ・ヤマブキの花が一度に見られ、カメムシがいつまでたっても家の中をうろろしている。また、今年はミツバチの分蜂

を一度も見していない。ミツバチを長年飼っている人に聞くと、いったん暖かくなった後、冷え込みが長く続くので、ハチが死んでしまうそうだ。そういう状況だと、小さいコロニーでは餌の蜜をやっても効果がないらしい。

冷夏と作物

人間の生存基盤として第一に重要なのは、食料生産の安定性である。現在の稲の品種は、コシヒカリ、あきたこまちを初めとして冷害に強いものがほとんど(キヌヒカリは比較的弱い)であるが、楽観はできない。稲に冷害が起こるメカニズムは、成長が遅れて実の入りが悪くなる、低温で受精が阻害される、長雨や日照不足で稲の抵抗性が弱まり、いもち病にかかりやすくなることによる。対処法には、深水灌漑をして保温効果を高め稲の生長点を守る、水田の水管理を効率的にする溝を田のなかに掘る、窒素施用量を控えるなどのほかに、危険分散のため、田によって作期をずらし多品種を植えることがある。どれも、昔から農家がやっていたことで、今日でも農業指導員が勧めているが、とにかくこまめに稲の面倒を見なければならない。

昔は、焼畑の作物も冷害対策に組み込まれていた。ことにカブラは、宮崎安貞の『農業全書』に、日照が悪くても育ち、いっぱい食べても体に不具合を生じない優秀な救荒食とされている。今年、そのことを確認するような事態にならないよう、祈るしかない。私たちは、まだ焼畑で雑穀を作ったことがないが、ヒエなどの雑穀は冷害に強く、雑穀栽培地では冷害の深刻な被害を免れてきたと言われている。稲の単一品種の単作でなく多品種栽培、水田だけでなく陸稲や雑穀を栽培する焼畑との組み合わせが推奨される時代になるのは、歓迎したくないが、その準備はしておかなくてはならないと思う。



写真 2: 残雪のなかの山かぶら(2009年3月)

亀岡フィールドステーション

保津川筏聞き取りノート④ 一筏の構造③ー

亀岡 FS 研究員 河原林洋

今回は、カセギと猿尾をみていく。

カセギとは、筏のソウ（3 連目）から猿尾までに渡って連をつなぐように組まれ、人間の体でいう背骨のような働きをする。カセギに使う木材は、筏に組まれるべき木材（長さ 2 間 1 尺＝約 4m、直径 3 寸＝約 9cm 以上）より細めで、連を組むには不適切な細身の木材を使う。まず、1 本目のカセギ（以下 A）をソウの縦の中間部分から 4 連目の中間部分まで渡す。渡す場所は筏の進行方向右側より 2～3 本目部分に土台となる連に沿わせて斜めに置く。次に 2 本目のカセギ（以下 B）を A の中間部分から、土台の 4 連目と重なるように、A の左隣に並べる。そして、3 本目のカセギ（以下 C）を B の左側、縦中間部分から 5 連目かけて、同じように置いていく。この手順を繰り返し、猿尾までつなげていく。

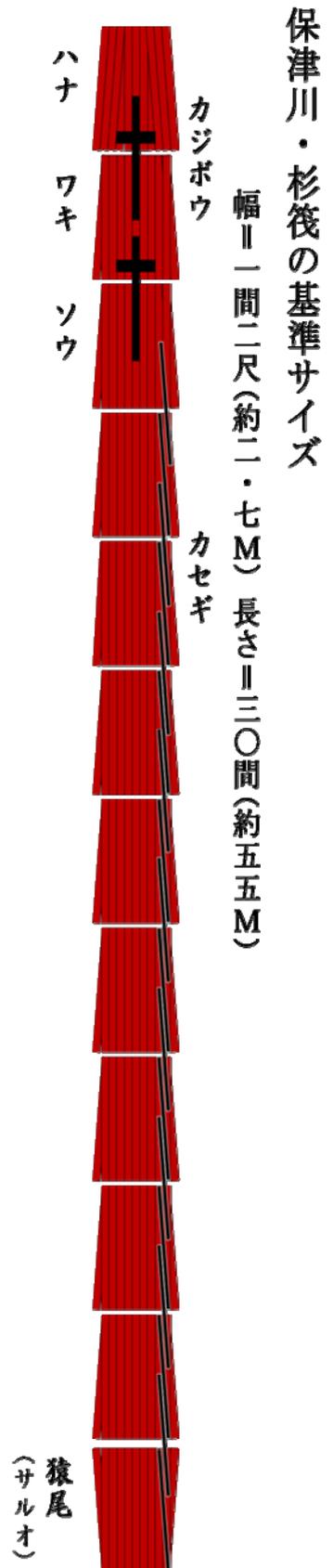
カセギを固定する方法は、まず、A の先頭部の右側、ソウを構成する木材にカンを打ちつけ、カンと A を藤蔓で巻き締めて固定する。A と B の交わる部分はちょうど 4 連目の先頭部分であるため、連を組む時に打ちつけられているカンを利用して A と B を藤蔓で巻きつける。さらに B の中間部と C の先頭部を B の右にカンで打ちつけ、藤蔓で固定する。この作業を猿尾まで繰り返し、カセギを固定していく。

このようにカセギを筏の右側に固定するのは、どういう意味があるのだろうか。元筏士の話と私の経験上で考えてみる。元筏士の話では、明確な理由は伺えなかったが、一つの理由として、このカセギは棹を差す筏士の歩く「道」的役割を担っていたという。全長約 55m の筏は狭く曲った急流を下る際、どうしても後尾は川沿いの岩に寄って行く。筏士は岩に筏が引っ掛からないよう岩に棹を押しあてながら、猿尾に向けて、カセギの上を走り、岩との接触を回避するのである。

さらに私の考えを付け加えると、保津から嵐山への川の流れは、左右に蛇行するが、基本的には左曲りである。また急所となる難所も左曲りが多い。筏の左側は自由に伸縮できるよう固定せず、左曲りに対応させる。右側にカセギを置き、背骨的役割を担わせ、筏全体を強固なものにしながら、筏士はカセギの上から棹を差し、危険を回避したのであろう。

最後に猿尾について述べておく。猿尾はそれまでの連とは反対向きになっている。これは、川の流れを緩和させるため、筏の後尾があまり流れに押されないように施されたものである。先程、カセギで述べたように筏の後尾の動きをどう制御するかが筏流しのカギである。最後尾を細くすることで後ろから迫ってくる川の流れをある程度受け流す。こうすることで筏の安定性を保ったのである。

今まで、3 回にわたって、保津川の筏の構造についてみてきた。保津川の筏は他地域の筏の構造がそうであるように、その地域性によってその構造を発展させていったのではないだろうか。山の立地、川の地形などの地域性により構造や構成物は選定されていった。このように筏流しは、人々と地域とのつながりのなかで形成された文化であり、人、山、川とがリンクしていたことを表す文化遺産ということができるのではないだろうか。



■第24回 定例研究会

1. 日時：平成22年5月28日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：藤井美穂（生存基盤科学研究ユニット）

換金作物栽培と森の生活の両立は可能か —甘いチョコレートがもたらす不平等— 京都大学こころの未来研究センター 大石高典

ざいちのちとは何か。作家の五木寛之は、『戒厳令の夜』という長編小説の中で、水沼隠志という怪しげなシャーマンに次のようにつぶやかせています。

「わしは学を忘れて歌をおぼえた片輪者と言えるのかもしれない。…しかし、事を為すのは歌であって、学ではない。」

地域の役に立つとか立たないということが実践なのではない、と安藤和雄さんからお聞きしたとき、私が思い出したのはこのセリフでした。

私は、アフリカのカメルーンの熱帯雨林に暮らす人たちの研究を続けて9年目になります。そこには焼畑農耕民と狩猟採集民が住んでいますが、優しく、シャイだけれど人懐っこいところに私は惚れこみました。焼畑でバナナやキャッサバを作りながら、森や川で狩猟採集や漁労を行い、足りない分は物々交換で補い合うというのが伝統的な暮らし方でした。

ところが最近、にわかには換金作物であるカカオ栽培が、生業の比重を増してきました。カカオの国際価格が上がると、町から来たバイヤーによって、わずかな借金の形としてカカオ園の権利が売買されるようになりました。借金の多くは、際限のないお酒の消費に消えてゆきます。そもそも土地に永続的な所有権や利用権を想定したことのない人たちが、借金が重なって、カカオ園ごと外部に土地が流れるケースが数件続けて起こると、村の中に危機感が走りました。



写真1: 森を開いて作られたカカオ園

生産物が高騰するほど、逆に在地の人間が貧乏になり「負債」が増えてゆきます。一体どれだけの人がカカオ園をもち、どんな畑づくりをしているのか気になった私は、GPSを使って、カカオ園の測量と地図化を行いました。その結果、意図しないことに地域で起こっている不平等の拡大を目に見える形で示すことになりました。他人の焼畑に立ち入るこ

4. 発表内容

「滋賀県山市開発（かいほつ）集落における竹の配水管の利用と『どっこいしょ』—旧野洲川伏流水の利用—」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

とがタブーな土地柄、互いがどれだけの畑を持っているのか、人々は知らなかったのです。

問題の背景には、人々の中の信頼の揺らぎがあります。個人ではなく、なんとなく親族集団で「所有」していたカカオ園の「権利」がカネになるというので、兄が結婚相手を探しに旅に出ている間に弟に畑を売られてしまったり、10年以上も前に離婚した妻が戻ってきて勝手に夫の畑を貸し出して賃料を持ち逃げ、といった悲喜劇のような事例を挙げれば暇がありません。あるいは、かつて家族どうしでキョーダイの契りを結んでいた農耕民と狩猟採集民の間で、農耕民側が勝手に弟分の狩猟採集民の畑を貸し出して賃料をせしめる、といったことが横行しています。これらのトラブルでは、個人と集団、集団と集団の間の論理・倫理の混乱が錯綜して表出しています。

そして、多くの園が軒並み質入れや質流れに近い状況になっていることに衝撃を受けた人たちの中から、これまで野放図にバイヤーや商業農民の言う通りにやってきたカカオ栽培のやり方を見直そうという動きが出てきました。親族や民族集団のレベルではなく、一つの地域として信頼関係が損なわれつつあることに対する危機意識が生まれてきたのです。

現金収入を確保しながら、どのように不平等に向き合えるのか。私は、研究者として事態の推移を見届けつつ、地域の人たちとカカオ栽培と森の生活の両立が可能になるような仕組みづくりを模索しているところです。

冒頭のシャーマンの言葉を借りれば、ざいちのちとは学ではなく、歌に近いものなのだという気がします。私はまだ、自分が付き合っている人たちが馬鹿にされたり、いとも簡単におカネに騙されてしまうのが悔しくて、情けなくて、もどかしくて、どうにかしたいという私情に駆られているに過ぎません。しかし、私憤なくして公憤なし。この思いと向き合うことが原点だと思っています。



写真2: 亡き夫が遺したカカオ園を案内してくれたバカビグミーの女性